阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業　新潟県

第６号
2012.3.14

阿賀野川 え～とこだより
aganogawa E-toko dayori

阿賀野川・最後の帆船（昭和25年、旧五泉・笹堀）撮影：木村清氏／提供：木村仁已氏

もくじ

特集１ パネル巡回展 ―― 2
「阿賀野川と共に生きたあの頃」
特集２ 写真が物語る
“風土と歴史が織りなす光と影” ―― 4
・砂利採取・石材・安田瓦・船頭
紙芝居「新潟水俣病との出会い ―― 7
～あき子ちゃんの夏休み自由研究～」
絶賛上演中
インフォメーション ―― 8

阿賀野川と共に生きたあの頃に これからの流域を深く探る

風土と歴史が織りなす光と影を丹念に辿ることで見えてくる流域の未来

1月からスタートした平成23年度パネル巡回展「阿賀野川と共に生きたあの頃～風土と歴史が織りなす光と影～」。すでに地元の方々など多くの皆様からご観覧いただき、大変ご好評をいただいています。

こうした「阿賀野川え～とこだプロジェクト」の様々な取組を通して気がついたのは、阿賀野川流域の光と影の歴史には、かつては輝いたけど今は失われた貴重な資源が数多く溢れていることでした。

それは消えつつある郷土料理かもしれないし、今はなくなってしまったかつての暮らしの知恵かもしれません。あるいは、資源の枯渇などで途絶えた地場産業かもしれないし、かつて隆盛し公害を境に衰退した企業城下町の歴史かもしれません。

しかし本当に重要な観点は、これら埋もれた過去の資源の数々が、現代では益々稀少な価値を高めつつあることです。それらをどう甦らせ流域再生に活かしていくべきか、流域に暮らす皆さんと共に探っていきたいと考えています。

水俣病被害者の方への給付の申請を受け付けています

～申請受付は平成24年7月31日までとなりました～

「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」に基づき、給付の申請を受け付けています。

対象となる方	給付内容
次の❶、❷のいずれにも該当する方 ❶昭和40年12月31日以前に阿賀野川でメチル水銀に汚染された魚などをたくさん食べたと認められる方 ※母体を通してメチル水銀を体内に取り入れた可能性がある方を含みます ❷一定の感覚障害（手足の先の方の感覚が鈍いなど）が認められる方	●一時金 ●療養手当 ●療養費 （医療費の自己負担分など） ※症状により療養費の給付のみとなる場合もあります

◆亡くなられた方についても、水俣病認定申請等の公的な診断による資料がある場合は、申請することができます。

お問い合わせ先
新潟県生活衛生課 TEL.025-280-5204 または 025-280-5207
新潟市保健衛生総務課 TEL.025-212-8016 または 各区役所健康福祉課
五泉市役所・阿賀野市役所・阿賀町役場またはその支所

「阿賀野川え～とこだプロジェクト」とは？

正式には「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業」(通称FM事業)と言い、阿賀野川流域の各地域が今も続く新潟水俣病と向き合い、それを乗り越えるような「人と人の絆」や「人と自然の関係」を紡ぎ直すため、流域の住民・行政・民間団体が手を取り合い、「新しい地域づくり」を目指して始まったプロジェクトです。

阿賀野川え～とこだ！憲章（事業理念）

私たちは新潟水俣病に学び教訓を伝承することで、負の遺産から新たな価値を創造していくことを目指します。阿賀野川流域の宝物を広く内外に発信しながら、公害により失われた人と人、人と自然、人と社会の絆をつむぎ直していきます。地域を愛する人が地域の未来をつくる「流域自治」の確立へ向けて行動します。　（阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業推進委員会）

編集後記

第6号はいかがでしたでしょうか？

これまで1年以上、地域再発見講座やパネル巡回展など、阿賀野川中流域でのイベントをメインに取り組んできました。その過程では、様々な地場産業、農業、観光業など多くの関係者の方々と、何度も「ロバダン！」（炉端談義）を開催しています。皆さんからは、本業でお忙しい合間を縫って、様々なイベントに積極的に関わっていただき、本当に感謝申し上げます！また、そうした過程で、お互いに信頼関係が育まれていった気がして、これこそ「もやい直し」（地域の再生・融和）の一環なのではないだろうか…と、しみじみ実感しました。

第7号は、いよいよ中流域における展開のフィナーレ。ご期待ください！

阿賀野川え～とこだより 第6号
発行：新潟県（2012年3月14日）
企画編集：阿賀野川え～とこだプロジェクト〈事務局／〒959-2221 阿賀野市保田3866-1〉
TEL.&FAX.0250-68-5424
aganogawa@niigata.email.ne.jp

「阿賀野川え～とこだ！ブログ」
http://www.aganogawa.info/
リニューアルまであと一歩…。

特集 1

パネル巡回展
阿賀野川と共に生きたあの頃
～風土と歴史が織りなす光と影～

かつて、阿賀野川の中流域では、その独特の風土と歴史が生み出した特色ある地場産業が盛んだった。しかし、昭和40年代、新潟水俣病の発生を境に、「人と人の絆」「人と自然の関係」が失われ、やがて流域も低迷し始める。そして現在、地域の未来を切り拓くために、地場産業が様々な試みを模索する中、あの頃の光と影の記憶を見つめ直し、流域の未来へどうつなげていくかを探る

阿賀野川中流域は山地から平野へと地形が変化する地点に位置し、阿賀野川と早出川が合流する影響から、かつては川が何本にも分岐するほど頻繁に河道を変遷させ、人々は洪水の度に甚大な被害に悩まされてきました。さらに、今でも山から川へと吹き下ろす局地風「ダシの風」が吹き荒れるなど、その独特な風土が人々の暮らしに様々な影響を及ぼしてきました。

地場産業の光と影

その反面、日本が近代化を遂げる明治から昭和の高度経済成長期にかけ、この独特な風土の影響を受けて、草水石・安田瓦・川砂利・酪農・船頭・漁業など様々な地場産業が生まれました。特に、近代化に必要な資源や資材を提供する産業が発展し、阿賀野川もそれらを運搬する舟運で栄えました。

しかし、阿賀野川と共に生きてきた中流域の人々の暮らしは、新潟水俣病の発生が確認された頃から、その影響も一因となり地域社会の中の「人と人の絆」が失われ始め、「阿賀野川と人々の関係」も疎遠になっていくなど、急激に変化していきました。このように新潟水俣病を始め、日本各地で公害問題が表面化した昭和40年代は時代が曲がり角を迎えており、その後、日本は低成長の時代に突入して、地方を中心に長い停滞に苦しむ現在に至ります。

地域の歴史から探る流域の未来

今回のパネル展をご覧いただき、阿賀野川中流域の光と影の歴史を通して過去を見つめ直していただくと共に、疲弊する地域の現状を打破しようと試行錯誤する現在の地場産業の方々の奮闘を通して、流域の未来について皆さんとご一緒に考えを深めていければ幸いです。

阿賀野川の分田樽河原場で砂利を運ぶ人（撮影：村上孟氏、提供：村上直行氏、昭和30年）

パネルに使用された様々な写真

被災した磐越西線（昭和42年、旧五泉・佐取）

昭和電工（株）鹿瀬工場
（鹿瀬工場タイムス昭和29年新年号・44号より）

阿賀野川の情景（阿賀野市千唐仁）撮影：山口冬人氏（JPS日本写真家協会会員）

パネル展「阿賀野川と共に生きたあの頃
～風土と歴史が織りなす光と影～」

主催：新潟県　共催：五泉市、阿賀野市　後援：新潟市、阿賀町　協力：咲花温泉・村杉温泉・安田温泉

河道の変遷やダシの風など、阿賀野川中流独特の風土が生み出した、特色ある地場産業の歴史を丹念に掘り起こしたパネル展を開催しています。草水石・安田瓦・川砂利・酪農・船頭・漁業…。これらの地場産業が昭和の高度成長期に発展を遂げた後、新潟水俣病が表面化した昭和40年代を境に急激に変化し、やがて現在に至るまでの光と影の歴史をご覧いただき、阿賀野川流域の現状とその未来に想いを馳せていただければ幸いです。以下のスケジュールにより、5月下旬まで五泉市・阿賀野市などで開催いたしますので、どうぞご覧ください。

●今後の開催スケジュール

展示期間	通常のパネル展	ミニパネル展
2012/3/3～3/18	●阿賀野市立図書館（9:30～17:00／毎週月曜・3/15休館）	●宝珠温泉保養センターあかまつ荘（9:30～20:00／入館料必要）
2012/3/20～4/8	●安田温泉　やすらぎ（9:30～22:00／入館料必要）	●咲花温泉　碧水荘（10:00～16:00）
2012/4/10～4/26	●道の駅「阿賀の里」（9:00～17:00）	●水原郷病院（8:30～17:00／毎週土・日曜休館）
2012/4/28～5/10	●五頭山麓うららの森（9:00～17:00／毎週火曜休館）	●阿賀野市安田公民館（9:00～21:30）
2012/5/12～5/27	●水原ふるさと農業歴史資料館（9:30～16:00／毎週月曜休館）	●さくらんど温泉（9:30～21:30／入館料必要）

※ミニパネル：通常パネル［A1サイズ］の半分の大きさですが、内容は全く同じです。

企画・問合せ先：阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業事務局　TEL&FAX：0250-68-5424

五泉市立図書館

保健福祉センター京和荘

咲花温泉　望川閣

村杉温泉　長生館

●これまでの開催会場

2012/1/21 ～ 2/9
通常のパネル展●五泉市立図書館
ミニパネル展●保健福祉センター 京和荘

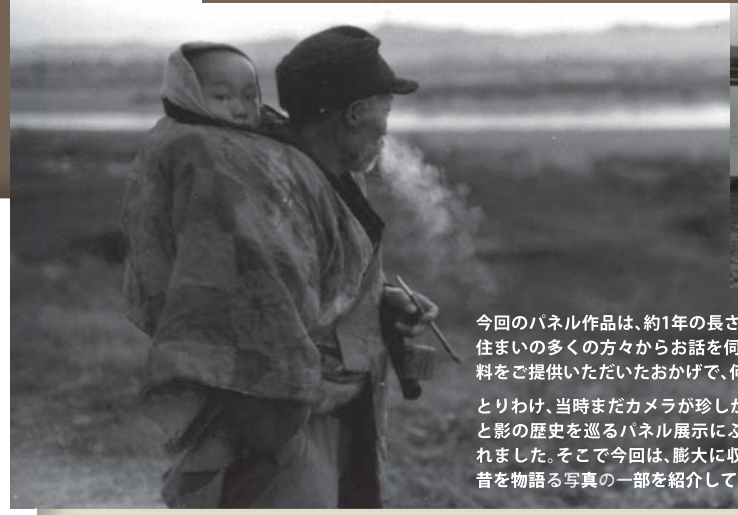
2012/2/11 ～ 3/1
通常のパネル展●咲花温泉　望川閣
ミニパネル展●村杉温泉 長生館

●来場者の感想

- ●読み始めたら、止まらなくなった。（50代/新潟）
- ●今昔の思い、感無量である。（80代/五泉）
- ●水俣病の話題はほとんど聞かない。差別偏見を恐れ声を出せないのだろう。（40代/五泉）
- ●この大河は宝なので景観が壊れないよう願う。（60代/五泉）
- ●現在も残る地場産業を大切にしていきたい。（70代/五泉）
- ●小・中学生への郷土学習の教材として活用しても良い。（50代/五泉）
- ●阿賀野川中流域はピンチをチャンスに変える底力があると再認識できた。（20代/村松）

特集 2　写真が物語る“風土と歴史が織りなす光と影”

～阿賀野川中流域の地場産業の今昔を見つめ、流域のこれからを探る～



左：子守りの老人が阿賀野川を望む　右：分田稗河原場での砂利採取の様子（撮影：村上孟氏、提供：村上直行氏）

今回のパネル作品は、約1年の長さに渡って、地場産業の関係者を中心に、中流にお住まいの多くの方々からお話を伺い、時には現場を拝見し、さらに様々な貴重な史料をご提供いただいたおかげで、何とか完成に漕ぎ着けることができました。

とりわけ、当時まだカメラが珍しかった昭和20～30年代の貴重な写真の数々は、光と影の歴史を巡るパネル展示にふさわしく、作品に独特の重みと余韻を与えてくれました。そこで今回は、膨大に収集した写真群の中から、中流域の地場産業の今昔を物語る写真の一部を紹介して、パネル作品の雰囲気を誌上でお伝えします！

●分田砂利採取協同組合の変遷

阿賀野川中流の良質な砂利の採取を糧とした分田・稗河原場。集落を細く長く続けていくため、急速な機械化には慎重だった。

昭和30年

機械化以前は、阿賀野川の底からサンパ舟で集めた砂利を担ぎ、土手を歩いて運搬した。
（撮影：村上孟氏、提供：村上直行氏）

昭和39年

昭和34年の組合結成以降は、資源を採り尽くさないよう、慎重な機械化が進められた。
（提供：分田砂利採取協同組合）

現 在

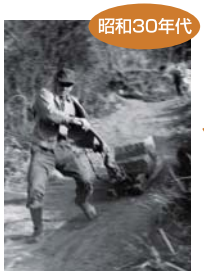
現在の砂利採取の舞台は陸地。阿賀野川の河道変遷のおかげで、今でも豊富な砂利が眠る。

●枯渇した安田・草水石の光と影

「桜御影」とも呼ばれ、国会議事堂の一部にも使われるブランド石材は、近年掘り尽くされ幻の名石となりつつある。

昭和30年代

（提供：田中利治氏）



（提供：内藤寅利氏）

大正時代から盛んになった安田・草水の山の石材採取。需要が急増した昭和30年代にはまだ機械化がされておらず、切り出した石材を「土そり」で運び出していた。

石材採取

昭和40年代以降は大型重機が導入され、採石量が格段に増えたものの、近年になり枯渇してしまった。写真右は現在の採石現場。

石材加工

昭和40年代以降、採石と加工が分かれ、それぞれ組合化された。石材加工組合の主力は墓石だが、現在は安価な中国製品に押され気味である。

●持続可能性を探る安田瓦の挑戦

「やすだ瓦ロード」を誕生させるなど、時代の変化の波に直面する伝統産業が、人との交流を大切にするまちづくりに着手し始めた。

昭和30年代

土練場から土を運搬する様子（提供：丸三安田瓦工業（株））

瓦で屋根を葺く様子（提供：丸三安田瓦工業（株））

現 在

安田瓦で復元された会津鶴ヶ城
（平成23年施工・提供：安田瓦協同組合）

安田・庵地の良質な粘土は、阿賀野川が運んだ砂が混じり、瓦づくりに適していた。独特の銀鼠色と雪国ならではの耐寒性が備わった安田瓦は、全国的に広く知られるブランド瓦となった。しかし、高度成長期に急増した瓦の需要も近年は減少傾向にある。

窯の変遷

江戸末期から始まった安田瓦の歴史では、これまで様々な窯が用いられてきた。

昭和30年代まで使用された平地窯の煙突
（提供：安田瓦協同組合）

主に昭和40年代に使用されたシャトル窯（提供：丸三安田瓦工業（株））

現在は工程の大部分が自動化された。下写真は自動トンネル窯から出てきた焼成後の瓦

成形・乾燥後の瓦の品質をチェックする様子

逸品づくりへのこだわり

村秀鬼瓦工房の作品。下は瓦を模した箸置き。「粘土工房ものがたり」で購入できる

代表の村山茂さん

やすだ瓦ロードの誕生

瓦の生産工場が建ち並ぶ保田地区を訪れた人たちが、瓦の装飾を楽しみながら散策できる観光スポット。将来の安田瓦への危機感を背景に、安田瓦の関係者が地域の人々と協力して誕生させた。

擁壁 瓦飾り

瓦庭園

さんかく広場のシンボルタワー
（提供：安田瓦協同組合）

ギャラリー「粘土工房ものがたり」

喫茶や粘土体験など

オーナーの遠藤秋子さん

ギャラリー「粘土工房ものがたり」／阿賀野市保田6130番地1　TEL.0250-68-3802　営業10:00～15:30頃　水曜・日曜休（不定休あり）P10台

●時代の流れと船頭家業の終わり

かつて阿賀野川では、渡し舟が日常的な情景だった。時代の変化とともに、自動車による道路輸送が中心となる中、船頭稼業は姿を消していった。

（写真２点とも提供：立川小三郎氏）

かつて阿賀野町（旧三川村）五十島の阿賀野川には県営の渡船場があった。立川小三郎さんが父親から船頭稼業を継いだのが、昭和33年秋、18歳の時だった。

立川さんが今も大事に保存する渡船場の標柱

新潟水俣病の発生

昭和40年6月、新潟水俣病が公表される。立川さんは自らの身体にも症状が出ていると自覚していたが、渡し舟の乗客が口にしていた差別偏見などが、自分の子どもに及ぶのを恐れ、声を上げられない日々が続いた。

（提供：読売新聞社／昭和40年6月13日）

（提供：立川小三郎氏）

船頭引退、そして・・・

昭和54年五十島地区にも橋が開通し、渡し舟はその役割を終え、立川さんも職場を去ることとなった。そうした中、40代で屋根の雪下ろしが困難になるなど、足の感覚障害などの症状も進んでいた。その後、70歳を迎えた平成22年、水俣病特措法「給付の申請」の受付開始等を知り、「多くの人が申請しやすい状況を・・・」と被害者として名乗り出ることを決意した。

開通した五十島橋（提供：新潟日報社）

渡し舟からおりて櫂（かい）をかつぐ立川さん（提供：新潟日報社）

環境省主催のセミナーで上演する「こっこ」（平成24年2月26日）

第3弾

紙芝居「新潟水俣病との出会い～あき子ちゃんの夏休み自由研究～」絶賛上演中!

「草倉銅山物語」「阿賀野川物語」と続く紙芝居3部作・完結編は、夏休みの自由研究で新潟水俣病を調べるため、阿賀野川流域を上流から下流まで駆け巡る小学生・あき子ちゃんの成長物語。これまでと同様、今回も制作者「こっこ」へ制作秘話を聞いてみました!

Q まずは、紙芝居全3部作を作り終えた感想を教えてください！

「草倉銅山物語が一番いい思い出ですね。2作目以降はだんだんテーマが重くなっていき、文章作りなど苦労したことが多かったかな」（板屋越さん）

「とにかくほっとしました！3部作を通して、水俣病や阿賀野川に対する誤解や偏見がなくなり、皆さんが地元や阿賀野川をもっと大切にしてくれればなって思います」（山口さん）

Q では、今回の新潟水俣病をテーマとした紙芝居の制作はいかがでしたか？

「文章作成が難しかったですね。わかりやすい言葉で、まとまりよく伝えることに苦戦しました」（板屋越さん）

Q 見どころを教えてください！

「色合いがカラフルなので、是非絵を見てほしいです！また、水俣病の症状や今も苦しんでいる様々な立場の方々についてよくわかってもらえると思うし、現代の社会問題にも通じる内容だと思うので、身近な問題と重ね合わせながら聞いてもらえたらと思います」（山口さん）

Q 最後に一言お願いします！

「新潟水俣病と同じような歴史を繰り返さないように、というメッセージが伝わってほしいです！」（板屋越さん）

「この紙芝居に出会った時に、足を止めて環境や差別について見つめ直す時間を少しでも作ってもらえたら嬉しいです」（山口さん）

紙芝居3部作の貸出も行っています。希望される方は是非お問い合わせください！

■紙芝居制作者「こっこ」／阿賀町などの若者（山口茉依さん・板屋越由希さんほか）からなるグループ。様々な史料や現地を調べた上で、親しみやすい絵とわかりやすい文を心がけて紙芝居を制作。グループ名の由来は“漬け物”を意味する阿賀町の方言。